

氏 名	かみ 神	やま 山	らん 藍
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)		
学 位 記 番 号	工 博 第 2786 号		
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当		
研究科・専攻	工 学 研 究 科 都 市 環 境 工 学 専 攻		
学位論文題目	景観資産としての山容景観評価方法に関する基礎的研究		

論文調査委員 (主 査) 教 授 樋 口 忠 彦 教 授 門 内 輝 行 助教授 川 崎 雅 史

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、景観資産としての山容景観を、大きく二つの側面から捉えて見出し、整理するものである。その一つは、比較的扱い易い視覚的側面(「見え方」とされる)であり、もう一つは、精神文化的側面(「見方」とされる)である。この両者についての評価方法を考察し、それらを京都北山における具体的な山容景観の事例において検証し、妥当性と限界を確認しながら、山の「見方」に基づいて存在した、多様な山容景観の捉え方を示した。

第1章は、序章であり、研究の背景・目的と、そのための手法を述べている。

第2章は、物理的視覚的側面である「見え方」と精神文化的側面である「見方」という、2つの側面から山容景観を整理する評価方法を提示している。「見え方」の指標としては、距離・仰角・透視形態を用いることとし、「見方」は歴史的文献に表現されている像の解釈によって把握することが説明されている。

第3章は、京都北山の大文字山への山容景観を対象としている。神としての「見方」、霊山としての「見方」、万燈籠としての「見方」、浄土としての「見方」、眺めとしての「見方」を把握し、特性を整理した。その結果は以下のようにまとめられる。山容が明瞭に見える領域においては、霊山としての「見方」と眺める対象としての「見方」があり、視覚的な要因から、視点場からの山容が捉えられている。明瞭な山容は見えない領域でも、山を神の降臨する処とする「見方」から、神の常住する山上が見えるという視覚性と、山の出入り口にあたる場所という空間性が重視されている視点場がある。山容が明瞭に見えない領域でも、視点場を極楽浄土とする「見方」から、視点場を神聖視されていた山にできるだけ近くに設ける、空間性の強い視点場がある。

第4章は、衣笠山への山容景観を対象としている。霊山としての「見方」、眺めとしての「見方」を把握し、特性を整理した。その結果は、以下のようにまとめられる。優れた山容が見える場所には、山を霊地とする「見方」と眺める対象としての「見方」があり、視覚性が重要視されていると言える。とりわけ、眺める対象としての「見方」の場合は、山容が重要視され、多少距離が離れている場合や仰角が高い場合であっても、視点場近傍の「見せ方」によって、不利な条件を克服している例が見られた。山容が特に秀でていない領域であっても、山の尾根が視覚のうえでは、山頂として見立てられるという視覚性と、山の出入り口である場所という空間性が重要視されている視点場がある。

第5章は、朱山への山容景観を対象としている。霊山としての「見方」、主山としての「見方」、眺めとしての「見方」を把握して、特性を整理した。その結果、優れた山容が見える場所には、霊山とする「見方」があり視覚性が重視されている点、視覚的に優れ、三方が山に囲繞されている空間には、山を主山として見る「見方」があり、空間性だけでなく、視覚性に優れているという点が指摘できた。

第6章では、大内山への山容景観を対象としている。霊を廻向する「見方」、眺めとしての「見方」を把握し、特性を整理した。ここでは、山容に優れ、空間的に三方が山に囲繞される領域には、霊山としての「見方」と眺める対象としての「見方」があり、視覚性が重要視されていた。

第7章は、結論であり、本論によって得られた成果を要約した上で、歴史的に形成された豊富な「見方」に対して、「見え方」の視覚的な要因だけでなく、視点場のおかれる空間的要因が深く関わり合っていたことを明らかにしている。そこから山容景観を特徴とする場所のあり方は、以下の3つにまとめられた。

- ① 視覚的要因によって強く価値付けられ、山が見られている。
- ② 文化的な要因によって強く価値付けられ、山が見られている。
- ③ 視覚的且つ文化的な要因によって強く価値付けられ、山が見られている。

さらに、これらの場所のあり方に基づく、今後の景観政策に対する提言も行なっている。

論文審査の結果の要旨

本論文によって扱われる山容景観は、見られる山の周辺に広がる地域の地理的属性として捉えられている。すなわち、視対象を山とした場合、従来見る側の問題としては把握されてこなかったが、ここでは一貫して、細かな単位の地理的領域における、文化的属性として評価する方法を探っている。そのための試行錯誤として、大きく二つの側面を提示した。一つは、比較的扱い易い視覚的側面（「見え方」とされる）であり、もう一つは、精神文化的側面（「見方」とされる）である。これは本研究において山容景観の性質を、視覚的情報が必ず何らかの文化的枠組みの中で感受されるものと捉えているためである。この両者についての評価方法を考察し、それらを具体的な山容景観の事例において検証し、妥当性と限界を確認しながら、山の「見方」に基づいて存在した、多様な山容景観の捉え方を整理した。その主な成果はつぎのとおりである。

(1) 北山を対象とし、限られた地域の山々に対して、重層的な山容の捉え方がされていたことを示した。すなわち、神として、霊山として、万燈籠として、浄土として、眺めとして、氏神として、主山として、霊を廻向する場として、それぞれ独特の視距離・仰角・透視形態を持っていたことを示した。

(2) 視点場の特性は、「見え方」として把握される視覚的側面の他に、大きな要因として空間的側面があることが確認された。

本研究で提示された方法は、ある景観を資産として認め、文化的価値を地域的に保有していくための必要な評価手法であると言える。このように本論文は、現在の価値観だけに囚われず、過去から継承されてきた歴史的な価値観をあわせて評価する方法を提案するものであり、学術的および実践的な面での貢献は大きく、景観工学の分野の発展に寄与するところが大きいと評価される。従って、本論文は博士（工学）の学位審査請求に値するものと認める。また、平成17年2月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。